

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520714

研究課題名（和文）

中国雲南地方の非漢民族における「歴史記述」の伝統

研究課題名（英文）

Tradition of the historiography in the non-Han ethnic group in Yunnan, China

研究代表者

林 謙一郎 (HAYASHI KENICHIRO)

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20294358

研究成果の概要（和文）：明代の雲南地方において編纂された文献から非漢民族による歴史記述を復原する方法についての検討をおこない、その過程で四種の明代雲南地方志（計約180万字）の電子化をおこなった。

研究成果の概要（英文）：This study examines the way for the restration of the historyography by non-Han ethnic group in Yunnan Province, China in the Ming period, and in the process carried out the digitization of four local chorography (difangzhi) of Yunnan (approx. 1.8 million characters total).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：中国民族史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：少数民族・歴史記述

## 1. 研究開始当初の背景

(1)日本国内においては大理国時代に関する研究はほとんど行われていない。本研究が主な分析対象とする明清時代の雲南史料に関しては近年立石健次がいくつかの史料について校訂・注釈を行っているが、彼の研究は明清代の白人（白族）の文化学術に重点が置かれており、大理国時代を直接扱うものではない。

(2)中国においては近年、大理国とその文献に関する研究がいくつか発表されており、段玉明『大理国史』がその代表であるが、段の研究は『南詔野史』などの明清時代史料を十分な分析を経ないまま利用しているところに問

題がある。侯沖『白国心史』は「白古通記」と呼ばれる南詔・大理国時代の佚書の復元を試みたものであり、本研究のテーマともっとも近い内容を扱っているが、「白古通記」一書にとられるあまり南詔・大理国時代の歴史記述の全体像に迫ろうとする視点に欠ける。

(3)従来の研究の明清時代雲南史料に対する態度を総括すると、(a)後代の編纂物であり信頼するに足りないとして使用しない、(b)南詔・大理国時代の歴史事実が反映されているとしてそのまま利用する、(c)史料の編纂された明清時代の状況を反映する史料として利用する、の三つのアプローチに大別できるが、本研究はそのいずれに偏るのでもなく、まず厳

密な史料批判を通じてこれらの史料がどのように利用されるべきものであるかを見極めるところに主眼を置くものでもある。

## 2. 研究の目的

(1)前項で述べたような背景を踏まえ、本研究の目的は中国西南非漢民族地区、とりわけ中国雲南地方・大理地区の前近代史を再構築する作業の一環として、10世紀から13世紀のいわゆる大理国時代における歴史記述の伝統、すなわち大理国の人々がどのように自らの過去を記述しようとしたのかを明らかにし、それによって大理国史の研究に新たな分析視角を導入することが最終的な目的である。

(2)そのためには、明清時代の雲南地方で編纂された歴史文献から、大理国時代の人々の記述に由来する部分を抽出する方法を確立する必要がある。本研究では性格・由来の異なる複数の史料群の比較検討から、その方法に関する手がかりを得ようとした。

## 3. 研究の方法

(1)分析対象史料の選定：明清時代に雲南地方において編纂された歴史文献のうち、大理国時代に関する記述を含むものは、いくつかのカテゴリに大別することができるが、そのうちこれまで南詔・大理国史の研究に利用されることが多かったのが『南詔野史』『南詔源流紀要』『滇載記』などの年代記的史書(以下「野史類」と呼ぶ)である。この種の史料には明代以前の中原王朝側で作られた文献には見出すことのできない情報が少なからず存在し、それが大理国史の研究に極めて重要な意味を持つ。例えば、大理国の王統ひとつをとっても、野史類の記載に頼らねば明らかにできないのである。しかし一方で、この種の史料の最大の問題は、多くの場合編纂者および成立年代が明らかではなく、各テキスト間の異同および、その継受関係を明確にすることが困難であるということである。これは本研究の目標とする、大理国時代に関する歴史記述の復原という点から見れば、致命的な問題点となりうるものである。

そこで、本研究ではこれら野史類とは系統の異なる史料である地方志類を分析の対象として選定した。地方志は言うまでもなく当時の地方政府において官僚の主導のもとに編纂されたものであり、その意味では直接的に大理国時代の歴史記述を継承するものとは言いがたい。しかしながらその編纂にあたっては地元の知識人・読書人がこれに参加す

ることも少なくなく、さらには明代にはすでに、かつての大理国の遺民である僰人のなかには科挙に応じて完了となるものも出現していたため、必ずしも両者が断絶していたわけではない。地方志類に関してはその編纂者、編纂の時期および経緯が判明する点が野史類にはない利点であり、これを比較検討の対象として用いることによって、大理国時代の歴史記述が明清時代の文献に取り込まれていく過程を追跡する手がかりになることが期待された。なお明清時代に雲南地方において作成された地方志は多数存在するが、上記のような利用目的に照らして、本研究では明代に編纂された省志(雲南志・雲南通志)を検討の対象とすることにした。

(2)分析対象資料の電子テキスト化：野史類のうちこれまで南詔・大理国史研究に最も用いられてきた『増訂南詔野史』(清朝乾隆年間のテキスト)については本研究開始以前にその主要部分を電子テキスト化し、研究代表者のWEBサイトに掲載済みであった(下記参照)。そのため、比較検討の対象とする明代地方志に関しても、順次電子テキスト化を進めることにしたが、野史類と比較しても地方志類は大部であることから、この作業は外注で行うこととし、このような地方志史料の電子化を盛んに進めている(有)凱希メディアサービスに依頼した。研究経費との兼ねいで、平成21年度に景泰『雲南図経志書』および正徳『雲南志』(後者は経費を繰り越して22年5月に完成)、22年度に万暦『雲南通志』、23年度に天啓『滇志』の電子テキスト化をおこない、23年8月には現存する明代雲南地方志(省志)全4種、約180万字の外注による基本的な電子テキスト化が完了した。ただし、このデータは十分な校正・校訂を経ておらず、また標点もほどこされていないため、そのまま外部に公開できる性質のものではない。

(3)対象文献の来源による分類・複数史料の比較：上記の作業と並行して、明清時代の雲南史料の系統に関する検討を進めた。明清時代に雲南地方において編纂された歴史文献には本研究で主に取り上げた野史類、地方志類のほかにも、『滇史』『滇雲歴年伝』などのような編年体史書が存在する。これらは記述の体例を一見すると、野史類と類似する点を持つ。しかしその内容を仔細に検討すると、多くは明清時代に雲南地方に流入した漢族人士によって、正史などの既存文献(その中に一部「野史類」を含む可能性もある)を再構成することによって作成されたものであり、「野史類」が大理国時代の歴史記述をかなりの割合でとどめていると考えられるのは大きく性格が異なる。明清時代から近代に至るまで、雲南地方の士人が同地方の歴史につ

いて学んだのは、実はもっぱらこのような編年体史書を通じてであり、その意味ではこれらの史書が果たした役割は改めて評価されるべきであるが、少なくとも本研究の目的に限定して言うならば、これらの史書の価値は高くはない。

また、野史類のなかでも早期に成立したと考えられるテキストの多くは非常に簡略で、支配者の系譜関係以外にほとんど記事がないことも多く、史書というよりも家譜・族譜の類を彷彿とさせるものがある。現在大理地区に居住する白族・彝族（および漢族）の有力家族の多くが家譜・族譜を伝えていることはよく知られており、このような資料の本研究への利用可能性も期待された。たまたま研究期間中に大理地区の白族の伝える家譜を集成した図書（『大理叢書・族譜編』）が出版されたため、入手して検討したが、これに収録された族譜の多くが節録であり、またすべて活字印刷のため原文書の様相を知ることができないため、今回の利用は見送らざるを得なかった。

(4) 検討結果の口頭発表と海外における学術交流：以上のような明清時代の雲南史料の系統に関する検討については平成 21 年 9 月に雲南大学人文学院歴史系（中国・昆明市）、22 年 10 月に中央民族大学歴史文化学院（北京市）において研究発表および討論をおこない、中国人研究者の意見を聴取することにとめた。

(5) 補助的作業（史料索引の作成）：22 年 8-9 月には、雲南地方史に関する最大の史料集成である『雲南史料叢刊』の本研究への利用可能性を検討し、あわせて同叢刊の書名・著者名索引を作成して WEB 上に公開した。この叢書は雲南地方に関する膨大な史料を収録しているものの、検索に難があり利用価値を損なっていたが、この索引の公開によってさらなる活用が期待される。

(6) 地方志の版本問題：今回分析・電子テキスト化の対象とした 4 種の明代地方志のうち、景泰『雲南図経志書』・正徳『雲南志』・万暦『雲南通志』については使用する版本にほとんど選択の余地はなかったが、天啓『滇志』については現在一般に影印本で流通し、また 1990 年代に発行された標点本（雲南教育出版社、1991 年）とは別系統のものが存在することが知られていたため 22 年 10 月に北京に出張した際、中国国家図書館、中央民族大学図書館などにおいて明代雲南地方志に関する調査を行った。その結果『天啓滇志』については上記の通り別系統の手写本が中央民族大学図書館に所蔵されており、閲覧可能（複写不可）であることが判明した。また同手写

本の複製が 90 年代に作成されていることもわかった（正式出版ではなく日本には未招来）。

#### 4. 研究成果

(1) 「原記録」の再構成（実現せず）：当初の研究計画では、上記のような分析を経て、対象史料が依拠したと考えられる大理地区で作成された「原記録」の面貌を可能な限り再構成する予定であったが、これは実現しなかった。その理由としては、1) 前項(2)で述べた分析対象史料の電子テキスト化が、外注に要する時間と経費の関係で大幅に遅れた。当初の計画では第 2 年度の前半までには終了すべきところ、第 3 年度の中盤にまでずれ込んだ。2) 託業者の作成した電子テキストにはかなりの割合で誤認識が含まれており、WEB 上に公開可能な形、および分析材料として使用できるテキストデータベースの形に整理するために、当初予定していた以上の工数と時間を要することとなった。この作業は現在も継続中であり、成果は WEB サイトに公開しつつあるが、現時点では完了時期は未定である。3) しかしこのような作業の遅れだけが、「原記録」の再構成を断念した理由ではない。分析対象の地方志を初歩的に検討するうちに、これらの中の「歴史記述」を左右する、より重要なファクターを無視できなくなったからでもある。

(2) 明代雲南地方志中の歴史記述の問題点：一般に地方志は、同じ地域を対象に何度も作成されるが、重修（再作成／改訂増補）の際には前志・旧志の内容を踏襲する部分が多いと言われる。地方志とは基本的には歴史書ではなく、編纂時点でのその地方の概覧・要覧のような役割を期待されるものだから、時事的なデータに関しては重修のたび増補・差し換えが行われるが、歴史に関する記載などは、せいぜい前志が編纂されて以降の事実が追加される程度であることが予想されたため、複数の地方志におけるそのような記載の相互比較、および野史類との比較を通じて最も原始的な内容を推測することが可能なのではないかと想定したわけである。しかしながら、今回主な分析対象とした明代の四種の地方志のうち、早期に成立した『景泰雲南図経志書』『正徳雲南志』には明代以前の雲南地方の沿革に関するまとまった記述がそもそも見いだせず、各府州の沿革として述べられている内容も、『元史』までの正史に書かれている範囲を越えるものがない。これについては、元代に李京が編纂した『雲南志略』の「雲南総叙」のほうが遥かに詳細である。『景泰雲南図経志書』が『雲南志略』を参照でき

なかったわけではないことは同書の「凡例」にも明記されており、編纂方針の違いとしか言いようがない。

(3)李元陽の「沿革大事考」：そして李元陽の編纂した万曆『雲南通志』にいたって初めて「沿革大事考」が作成される。これは同じ李元陽が編んだ嘉靖『大理府志』にもほぼ同じ内容が「沿革史証」として収録されている。これらの記事にはしばしば「旧志」が引用されているが、上記のようにそれ以前の明代地方志には該当する記述がなく、また李京『雲南志略』の「雲南総叙」とも内容が異なり、はるかに詳細になっている。したがって「沿革大事考」「沿革史証」の記述は、李元陽自身が同地に伝わる何らかの史料にもとづいてまとめたものであることはほぼ確実である。更には、李京の「雲南総叙」から李元陽の「沿革大事考」「沿革史証」への変化は、方向としてはさらに後代の『南詔野史』類への過渡段階を示すものであるとも言える。もちろん『南詔野史』が李元陽の文をそのまま引き写したとは考えられない。が、それでもなお、雲南における歴史叙述の基本的なスタイルが決定づけられるにあたって李元陽の果たした役割は従来考えられていた以上に大きかったことが予想される。自らも大理出身の白族学者である李元陽に関する更に掘り下げた研究が望まれるところである。

このような李元陽とその業績に対する再評価は、本研究の当初の見通しとは大きく異なるものであり、そのことが次項に見えるような、現時点での本研究のアウトプットの少なさの原因となっている。しかしながら、上に示した明代雲南地方志に関する分析結果、および本研究で作成した明代雲南地方志のテキストデータを公開することによって、これまで必ずしもアクセスが容易ではなかったこれらの史料を広く利用可能にすることは、今後の雲南地方史研究の新たな基盤としての役割を果たすものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 0 件)

本研究の成果に関する論文発表・学会発表は準備中であり、現時点で発表済、掲載決定

済みのものは存在しない。

[図書] (計 1 件)

謝道辛 (著) 林 謙一郎 (訳) 『大理日本四僧塔』雲南民族出版社、2009 年、230p.

[その他]

ホームページ等

・「雲南史料叢刊書名・著者名索引」  
<http://toyoshi.nagoya-u.ac.jp/ymslck/>

雲南史料に関する漢文史料の最大の集成的の一つである『雲南史料叢刊』(方国瑜主編, 雲南大学歴史系編) の収録署名・著者名を簡易データベース化し、日本語・中国語でオンライン検索できるようにしたもの(2010年作成)。

・「雲南・東南アジアに関する漢籍史料」  
<http://toyoshi.lit.nagoya-u.ac.jp/maruh/a/kanseki/>

本研究で検討の対象とした『増訂南詔野史』および『雲南志略』雲南総叙の電子テキストを掲載。

・「明代雲南地方志」  
<http://toyoshi.lit.nagoya-u.ac.jp/maruh/a/difangzhi/>

本研究で電子化をおこなった明代雲南地方志のテキストデータ(順次公開準備中)。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

林 謙一郎 (HAYASHI KENICHIRO)  
名古屋大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：20294358

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし